大学2年生に対するキャリア教育科目の効果測定IV

○永作 稔¹・櫻坂 英子¹(¹駿河台大学心理学部)

キーワード: キャリア教育, キャリア・アクション・ビジョン・テスト (CAVT), 大学生

Evaluation of a career education program for sophomore students IV

Minoru NAGASAKU¹ & Eiko OSAKA¹(¹Surugadai Univ.)

Key words: career education, career action vision test (CAVT), under graduates

【 問 題 と 目 的 】

近年、高等教育における教育改革の一環として低学年時から将来を見据えたキャリア教育科目を実施することが多くなった。永作ほか (2012) は大学2年生にむけたキャリア教育科目の効果測定を行ったが、統制群や対照群を設定したうえでの検討という点で課題が残った。そこで、本研究では永作ほか (2012) が報告した翌年度の授業で同様の効果測定を行い、さらに適切な対照群を設定して比較検討を行う。本報告では、効果測定に用いる指標を項目ごとに比較、分析することを目的とする。

【 方 法 】

調査対象: 介入群 首都圏私立大学の心理学部に在席する大学生のうち10月と翌年1月の2回の調査にいずれも回答した98名。履修登録者に対する有効回答者の割合は72.0%であった。**対照群** 介入群と同大学同学年別学部在籍し、同年度同学期にキャリアデザインという同名別授業を履修した大学生のうち2回の調査にいずれも回答した131名。

調査時期: 2012年度の秋学期授業前(初回授業の冒頭:10月)と授業後(最終授業の最後:2013年1月)に実施した。

調査内容: CAVT 達成版(下村ら, 2009)を実施した。これはビジョンとアクションという2つの下位尺度で構成されており、各6項目について「全くできなかった(1)」から「十分できた(5)」で評定する。これらの項目は大学生のキャリア発達において重要とされる事柄について測定しており、得点が高いほど進捗の実感度が高いように得点化される。調査は授業内に一斉配布し、その場で回収した。

【 結 果 と 考 察 】

CAVTの各項目について項目得点の変化を検討するために、2(群)×2(時期)の2要因分散分析を行った(TABLE 1)。

TABLE 1 二要因分散分析による授業前後のCAVTの各項目得点比較

下位尺度	項目	各項目得点の平均値と標準偏差				分散分析		
		介入群		対照群		群	時期	交互作用
		授業前	授業後	授業前	授業後			
ビジョン	項目1	2.50 1.02	3.34 .98	2.35 .97	2.70 1.04	12.09**	70.91**	11.85**
	項目3	2.59 1.15	3.38 1.06	2.56 1.13	2.80 1.05	6.00*	41.55**	11.98**
	項目5	2.76 1.22	3.39 1.12	2.83 1.19	2.82 1.16	6.40*	27.57**	7.94**
	項目7	2.21 .97	3.19 1.08	2.44 1.08	2.73 1.04	n.s.	61.62**	18.17**
	項目9	2.78 1.02	3.43 .97	2.59 1.02	2.96 1.53	9.18**	37.20**	2.75†
	項目11	2.65 1.09	3.30 1.09	2.56 1.09	2.80 1.13	5.49*	31.53**	6.73*
アクション	項目2	2.47 1.12	2.85 1.21	2.40 1.08	2.69 1.14	n.s.	16.37**	n.s.
	項目4	2.18 1.19	2.74 1.12	2.41 1.16	2.58 1.07	n.s.	18.94**	5.85**
	項目6	2.51 .99	3.01 1.09	2.69 1.11	2.67 .99	n.s.	8.79**	10.56**
	項目8	2.76 1.20	3.18 1.13	2.90 1.13	3.12 1.13	n.s.	13.22**	n.s.
	項目10	2.99 1.13	3.31 1.09	2.85 1.02	2.99 1.03	3.63†	8.27**	n.s.
	項目12	2.71 .93	3.34 .86	2.89 .93	3.02 .96	n.s.	30.05**	12.24**

n.s. > .10, *p < .10, **p < .05, ***p < .01

FIGURE 1 項目7「将来に備えて準備する」の得点変化

その結果、すべての項目で授業後に項目得点の有意な上昇が示された。また、12項目中8項目で交互作用が有意であったため、それらすべてにおいて単純主効果検定を行ったところ、介入群は対照群に比べて授業後に得点が上昇していることが明らかになった(Figure1参照)。交互作用が有意ではなかった項目9,2,8,10では、時期の主効果が有意であり、すべて授業前と比べて授業後の得点が高いという結果であった。

下位尺度別に検討すると、ビジョンの項目は6項目中5項目で交互作用が有意であり、介入群は対照群と比較して有意に得点が上昇していた。また、残りの1項目(項目9: 将来のことを調べて考える)についても交互作用が有意傾向であり、他の5項目と同様の傾向がある可能性が示唆された。これらのことから、ビジョンについては介入群の授業が全般的によりよくキャリア発達をうながしていたと考えられる。一方で、アクションの項目は6項目中つぎの3項目において交互作用が有意であり、「項目4: 尊敬できる人に出会える場に積極的に参加する」、「項目6: 人生に役立つスキルを身に付ける」、「項目12: 様々な視点から物事を見られる人間になる」であった。つまり、介入群の授業がこれらの項目によって測定された事柄をよりよく伸長させたと考えられる。

以上のように、介入群と対照群の両群にいずれも項目得点の上昇が見られたにも関わらず、介入群の伸び率が高かった背景としては、授業形態の違いが考えられる。対照群は主に典型的な講義形式の授業スタイルであったが、介入群ではグループワークなどを頻繁に取り入れたアクティブラーニング型授業が展開され、学生間および学生と教員間の相互作用が数多く生じる授業スタイルであった。そのことが、授業の効果につながった可能性があると考えられる。

【 引 用 文 献 】

下村英雄・八幡成美・梅崎修・田澤実 (2009). 大学生のキャリアガイダンスの効果測定用テストの開発 キャリアデザイン研究, 5, 127-139.